第十六章　致虚極

虚を致すこと極まり、静を守ること篤ければ、万物ならびおこる。（虚は不動の心。静は作為しないこと）
われ以てその復するをみる。
それ者は芸芸（うんうん）たるも（繁茂しているが）各々その根に帰す。
根に帰するを静といい、これを命に復す（運命をさかのぼる）といい、
命に復するを常といい、常を知るを明という。（常は不変。明は明白）
常を知らざれば妄作（もうさく）して凶なり。（妄作は軽薄なおこない。凶はのろい）
常を知れば容（認める）、容なればすなわち公（公平無私）、
公なればすなわち王（公の道）、王なればすなわち天（天然自然）、
天なればすなわち道、道なればすなわち久しくして、
身を没するもあやうからざるなり。（没身は死ぬまで）

［訳者註］
この章は「自然に帰れ」という唯物主義の輪廻説を老子が祖述したものである。唯物論の輪廻（りんね）は物質が動物界、植物界、鉱物界を流転する説。

第十七章　太上下不知

太上（昔）には下（人民）はこれ有るを知らず、（異本には不知有之を知有之とせるあり）
その次にはこれに親しみ、これをほむ、
その次にはこれをおそれ、その次にはこれをあなどる。
故に信たらざれば信ぜざるあるなり、（政治の嘘偽のため）
猶兮（ゆうけい）として（ぐずぐずして）、それ言をたっとび、
功なり事とげて百姓（人民）みなわが自然なりという。

［訳者註］
昔は人民は幸福に生活していたのだが老子の時代は戦国時代、春秋時代であった。中国古代の民謡「鼓腹撃壌の歌」、日出て作り、日没していこう、井をうがって飲み、田を耕して食す、帝力われに何かあらんや（作者不明）。これが中国の土民の一般思想であった。

第十八章　大道廃

大道すたれて仁義あり
ちえ出て大偽（たいぎ）あり、（大偽、大うそつき）
六親（親子、兄弟、夫婦）和せずして孝慈あり、（親孝行やめぐみ）
国家昏乱して忠臣あるなり、（国がみだれたから忠義がでたのだ）

［訳者註］
孔子の旧慣墨守に向かっての皮肉な悪口であり、社会的偽善に勇敢な抗議をしたもの。
無為にして化すれば大道が復活するのだ。

第十九章　絶聖棄智

聖を絶ち智をすつれば民の利は百倍せん
仁を絶ち義をすつれば民は孝慈に復せん
巧を絶ち利をすつれば盗賊あること無からん。
この三つのものは以て（思うに）文なるのみ。しかしていまだ足らざるなり。（異本に「以思為」

の三字を欠くものあり）
故に素（そ）をあらわし属するところあらしめよ。
樸をいだき私を少なくし慾をすくなからしめよ。（樸は丸太棒のように山出しの正直な、粗野な人間性）（十五、二十八、三十二、三十七、五十七章にある樸の字参照）

［訳者註］
神聖と智能との権威はほんとに人民に損をさせている。そして生産が社会の必要のためではなく私利のためにつづく限り、盗みと搾取は亡びまい。老子は急進主義者でもなく、保守主義者でもなかった。かれは古代の民の質素さをしたっていた。僕を卑しめる弊風は和歌の金剛石の歌に表れた貴族思想が代表している。

第二十章　絶学無憂

学を絶たばうれいなからん、唯（い）と阿の相去るいくばくぞ、（唯と阿とは返事の「はい」と「へい」のちがいだけ）
善と悪とあい去るいかん。（善と悪もたいしたちがいはない）
人のおそるるところはおそれざるべからず。（四章和光同塵参照）

荒兮（こうけい）としてそのいまだきわまらざる哉。（荒兮は、永続してその道がつづく）
衆人はききとして大牢をうくるが如く（よろこんで大宴会によばれる）、
春台（房事の床）に登るが如きも、
我はひとり泊兮（はくけい）として（老子は静かに）それいまだきざさず。
嬰児のいまだ孩せざるがごとく（赤んぼうがまだ笑い始めないように）
乗乗（じょうじょう）として帰するところなきがごとし（疲れてうろうろしているようだ）
衆人みなあまりありてしかもわれひとりわすれ（遺）たるごときも、我は沌々として愚人のこころならんや。（混迷しておろか者の心のように）
俗人はみな昭昭（わるがしこい）たるも、我はひとりくらきがごとし（我だけはうっとうしいようだ）
俗人は察察たるも（もの見高い）我はひとり悶悶たり（なやましい）
澹（たん）けいとして海のごとく（広く海のように）りょうけいとして（飄がえるように）とどまるところなきがごとし。
衆人はみな以てすることあるも（利用するが）、我はひとり頑かつ鄙なり（私は頑固で粗野である）
我はひとり人に異ならんことを欲して、しかして食母（しぼ）をたっとぶなり（食母は授乳してくれた母）

［訳者註］

孔子は「知識を富ませ時にそれを習うのは、ほんとの心の喜びではないか」と言った。しかし、老子は不学蒙昧を宣言して道徳の俗人的虚偽に対抗して、西洋の自由放任の非教育主義に一脈相通じる無為にして化する教化の道を開拓した。

第二十一章　孔徳之容

孔徳の容（よう）はただ道にこれ従うなり（孔徳の容は空の徳の相）
道の物たる、これ恍（こう）、これ惚（こつ）たり（恍は空想。惚は混沌）
惚兮（こつけい）たり、恍兮（こうけい）たるもその中に象（しょう）あり（象はすがた）
恍兮（こうけい）たり、惚兮（こつけい）たるもその中に物あり（物は道、道は空に非ず、故に物と仮称する）
窈兮（ようけい）たり（窈はくらがり）、冥兮（めいけい）たるも（冥はうすぐらい）その中に精（本質、分散して万物の質をなするのが道のはたらきである）あり。
その精たるや甚だ真にして、その中に信あり。
いにしえより今におよびてその名は去らず、もって衆甫（しゅうほ）をすぶ。（今まで変らず、万物のはじめである）

われなにを以て衆甫（しゅうほ）の然（しか）るを知れる哉。（私がどうして万物のはじめを知ったかといえば、万物（衆）に本質があるからである）
これを以てす。

［訳者註］
この章は道と徳の不可分の説明である。道は有無の現象の中に形と、物と、精をもっているのである。

第二十二章　曲則全

曲なればすなわち全く、枉（おう）なれはすなわち直（なお）く（枉はまがっている）
窪（あ）なればすなわち盈ち、弊（ふる）ければすなわち新しく（窪は凹んでいる）
少なればすなわち得、多ければすなわち惑わん。
これを以て聖人は一をいただきて（ただ一つの道を守る）天下の式（模範）となる。
みづからあらわさず、故に明かなり。
みづから是（ぜ）とせず、故にあらわる。
みづから伐（ほこ）らず、故に功あり。

みづから矜（ほこ）らず、故に長し。
それただ争わず、故に天下よくこれと争うことなし。
いにしえのいわゆる曲なればすなわち全しとはあに嘘言ならんや。まことに全くして、しかしてこれに帰するなり（これに、道に帰着するのだ）

［訳者註］
老子は第四次元又は相対性論の祖述者であった。（第四十五章参照）非ユークリッド幾何学の宇宙空間まがりは曲の方が直であり、或は直線は時間と空間のねぢれに従うよりも長いが故であることに気がついたらしい。

第二十三章　希言自然

希言（きげん、無声の言）は自然なり、故に
飄風（ひょうふう、大風）は朝（ちょう）をおえず（朝までつづかない）
驟雨（しゅうう）は日を終えず
いづれかこれをなす者ぞ。天地なり。
天地すらも、なを久しきこと能わず、しかるにをいわんや人においてをや。

故に道に従事する者は道は道に同じうし、
徳とは徳に同じうし、失とは失に同じうす（失は失敗、損失）
道に同じうする者は道もまたこれを得ることをたのしみ、
徳に同じうする者は徳もまたこれをえることをたのしみ、
失に同じうする者は失もまたこれをえることをたのしむなり。
信たらざれば信ぜざることあり、焉（えん）。（焉、は決定の意ある終句）
［訳者註］
無声の言（希言）のできる者だけが、他人に影響を与えうるのだ。

第二十四章　跂者不立

跂（つまだ）つ者は立たず、跨（またが）る者は行かず。
みづからあらわす者は明かならず、みづから是（ぜ）とする者は彰（あら）われず。
みづから伐（ほこ）る者は功無し、みづから矜（ほこ）る者は長からず。（伐る、は攻撃する。矜る、は尊大ぶる）
その道にありてや餘食（ししょく、食べ過ぎ）贅行（無駄な行為）といい、

物あるいはこれをにくむ、故に有道者はあらざるなり（物は道）
［訳者註］
礼儀のありふれた賢明な見解がここでは道の思想と合致している。

第二十五章　有物混成

物ありて混成し天地に先だって生ぜり。（物は道）
寂（せき）たり、寥（りょう）たり。（さびしく、しずかである）
独立してあらためず、周行してあやうからず。（宇宙をめぐって）
もって天下の母たるべし。
我はその名を知らざるに字（あざ）してこれを道といい、
しいてこれが名をなして大といい、大を逝（せい）という。（逝は無限を行く）
逝を遠といい、遠を反という。（極から始めにもどるのが反）
故に道は大、天も大、地も大、王もまた大なり。（王は人民の尊敬する者）
域（いき）中に四大ありて王はその一におる、焉（えん）。（焉は決定の句末）
人は地に法（のっと）り、地は天に法（のっと）り、天は道に法り、道は自然に法るなり。（法

る、は法則とする）

［訳者註］

宇宙とその法則を人間の一生と比べての純哲学と抽象的説明である。「王」とは国の首長ではなく人民の尊敬する者で「非理法権天」の相尅の部属による道の把持者をいう。

第二十六章　重為整根

重は軽の根たり、静は躁の君たり。（躁の君はさわがしさの支配者）

これを以て聖人は終日行けども輜重（しちょう、旅行用品の車）を離れず。

栄観（面白い見もの）ありといえども燕處（えんしょ、くつろいで坐っている）して超然たり

いかんぞ万乗の主（兵一万の長）にして、しかも身を以て天下に軽くせるぞ。

軽くすればすなわち君を失わん。

［訳者註］

軽は軽卒、重は慎重謹厳、老子が徳のある人の態度として推奨する泰然自若たる心の安定平静の一例。

第二十七章　善行無轍迹

善行に轍迹（てっせき）なし。（うまく通ったあとはあとかたがない）善言には瑕謫（かたく、きず、とがめ）なく、善計には籌策（ちゅうさく、はかりごと）を用いず。

善閉には関けん（とじる、かんぬき）なくて、しかも開くべからず。

善結には縄約（じょうやく）なくして、しかも解くべからず。（結び目がなくてもとけない）

これを以て聖人は常によく人を救う

故に棄人（きじん）なし。常によく物を救う。故に棄物なし。

これを襲明（しゅうめい、光の伝統、実践経済）という。

故に善人は不善人の師にして、不善人は善人の資（助手）なり。

その師をたっとばず、その資を愛せざれば、知たりといえども大いに迷えるなり。

これを要妙という。（要妙は大切な極致、人知を越えた至極、至妙の道）

［訳者註］

経済は常に宇宙の道と一致せねばならぬもので、真の意味の善がそれである。

第二十八章　知其雄

その雄を知りて、その雌を守れば天下の谿（けい）となる。（雄は積極、雌は消極。天下の谿は、水が谷に落ちるように天下はここに帰着する）
天下の谿となれば常徳（不変の徳）は離れずして、嬰児（えいじ）に復帰す。
その白を知り、その黒を守れば（白は明智、黒は愚昧）、天下の式（模範）となる。
天下の式となれば常徳はたがわずして（たがう、裏切る）、無極（虚無）に復帰す。
その栄を知り、その辱を守れば（栄辱、十三章参照）、天下の谿となる。
天下の谿となれば（天の帰着点）、常徳はすなわち足って樸に復帰す。（樸は道の現象）
樸散すればすなわち器となる。（器は有用な人材）
聖人はこれを用いて、すなわち官長となる。（官長、政府の長）
故に大制（大きな組織）にしてさかざるなり。（樸を割るようなことをせず、完全な道のままにしておく。大制は宇宙の組織）

［訳者註］
樸は山出しの丸太棒で、人為のない質樸な人で粗野な天真爛漫な性格を言い、もしそんな人材で人為的に官吏を作れば有徳の人ができるのだから、樸は割らずにそのままにしておくべきである。

第二十九章　將欲取天下

天下を取りこれをおさめんと將欲するも、われはいまだ得ざるを見る。
天下は神器なればおさむべからざるなり。（神器は精神的事物）
おさめんとする者はこれをやぶり、とらんとする者はこれを失わん。
およそ物は或は行き、或はしたがい、或は嘘（うそ）ぶき（嘘は、吹いて温める）、或は吹き（吹は、吹いてさます）或は強くし、或はよわくし、或はのせ、或はやぶる。これを以て聖人は甚（じん、ゆきすぎ）を去り、奢（おごり）を去り、泰（安泰、無事）を去る。

［訳者註］
天下の権力的征服に反対して老子はこの章で全面的に英雄主義を粉砕した。

第三十章　以道佐人主

道をもって人主をたすくるものは天下を強くし、兵をもってせず。
それ事はかえるを好む、いくさのおりし所には荊棘（けいきょく）生ず、焉（えん）。
大軍の後には必ず兇（きょう）年あり。故に善者は果（か）してやむ、強をあえてとらず焉。

果して矜（ほこ）ることなかれ、果（か）して伐（ほこ）ることなかれ。（矜る、えらぶ。伐る、せめてうつ。果して、決断して、決心して）
果しておごることなかれ、果してやむを得ざれ。果して強なるなかれ、
物はさかんなれば、すなわち老ゆ。
これを非道という。非道なれば早くやむなり。（非道、五十五章参照。道でないこと。小壮の者が老いるのが常の道である）

［訳者註］
これが老子の非暴力の反軍国主義である。平和主義だが、権力に反対する徹底した抵抗である。

第三十一章　夫佳兵有

それ佳兵（強い兵隊）は不祥の器にして（不吉の道具で）、物あるいはこれをにくむ（道がそれをにくむ）故に有道者はおらざるなり（そこに身をおかない）。
これを以て君子はおるに、すなわち左をたっとび、兵を用うるには、すなわち右をたっとぶ。
兵は不祥の器にして（凶器）、（右は陰、左は陽）（三十六章参照）君子の器にあらず。

やむを得ずしてこれを用うるも、
てんたん（あっさり、しずかに）を上とし、勝つともしかも美とせざるなり。
これを美とする者はこれ殺人をたのしむなり。
それ殺人をたのしむ者はすなわち志（ねがい）を天下に得べからず矣（い）。（矣、断決の結字）
故に吉事には左をたっとび、凶事には右をたっとぶ。
これをもって偏（へん）将軍は左におり、上将軍は右におる。（偏将軍は副将軍）
喪礼（そうれい、とむらい）を以てこれにおるをいうなり。（殺人の責任者たる上将軍は不吉な右の方に着席する）
衆を殺すこと多ければすなわち悲哀を以て泣き、たたかいに勝てばすなわち喪礼を以てこれにおるなり。

［訳者註］
二千三百年前の戦争反対の宣言である。殺人者たる上将軍への嘲罵で、中国の古風が左を上位としたが凶事にはその反対に右を不吉な表現としたことを取りあげたもの。

第三十二章　道常無名

道は常に名なく、樸にして少なりと雖も天下はあえて臣とせず、（天下は道や樸を臣下とすることはできない）
侯王もしよく守らば、万物はまさに賓せんとす。（賓は客。王侯が道を守れば万物は集ってくる）
天地はあい合して以て甘露を降し（天と地がうまく平和なら甘い露がふってきて万民幸福になれる）
民はこれを令することなくして、しかもおのずからひとしからん、始めて制して名あり。（命令しなくても自発的に人民が組織する）
名もまた既にあるも、それ亦まさに止るを知らんとす。
止ることを知るはあやうからざるゆえんなり。
たとうれば道の天下にあるは、なお川谷（せんこく）の江海に於けるがごときなり。

［訳者註］
世界の本質は素材の樸のように質朴な人為で開化されない徳のようでありたい。

第三十三章　知人者智

人を知る者は智にして、みづからを知る者は明なり。（自づからを知る、自己拒否、自制）
人に勝つ者は力ありて、自づからに勝つものは強なり
足ることを知る者は富み、おこないを強（つと）むる者は志をたもつ。
その所を失わざる者は久しく、（信念を失わない者）
死するも亡びざる者は寿なり（寿は長命、不死）

［訳者註］
常識への警告である。「足るを知る者はとむ」の句は仏典にある「足ることを知らざる者は富めるも貧し…」と一致している。この句から取った「吾唯足知、われただ足るを知る」の四字を組み合わせて石に刻んだ手水鉢が京都の龍安寺にある。

第三十四章　大道汎兮

大道は汎兮（はんけい）として（あふれて）、それ左右すべし。（どちらへでも行ける）
万物は恃（たのみて、依存して）以て生ずるも、しかも辞せず。
功なるも名として有せず（成功しても自分のてがらにしない）
万物を愛養して、しかも主とならず。小と名づくべし、矣。
万物は帰すれども（帰属する）、しかも主と成らず。名づけて大となすべし矣。
これを以て聖人はついに大とならず、故によくその大をなすなり。（大、万事万物みなこの大に戻る）

［訳者註］
有徳者の謙遜は道の本質と調和し、人間と宇宙はこの公理によって一致できるのである。

第三十五章　執大衆

大象（たいしょう）をとれば天下はゆく。
ゆくも害せず。安平泰なり。（平和で幸福）
樂（がく）と餌（じ）とは過客（通行人）とどまるも、道の口より出づるは淡乎（たんこ）として味なし。
これをみれども見るにたらず。これをきけども聞くにたらざるも、
これを用うるればつくすべからず。（自然のすがたの通りにすれば天下は平和である）（音楽や食物には一時は人がひかれるが、道は味もないが用いたら永久に変らない）

［訳者註］
汲みつくせない大きな道の現象は特別の味はない。もし何か特別に性質があれば無限に続かない。

第三十六章　將谷歙之

これを歙（おさめ）んと將（しょう）よくすれば必ず固（しばら）くこれを張れよ。（歙、羽根を閉じる）
これを弱くせんと將欲すれば必ずしばらくこれを強くせよ。
これを廃せんと將欲すれば必ずしばらくこれをおこせよ。
これを奪わんと將欲すれば必ずしばらくこれを與えよ。
これを微明（かくした燈）というなり。
柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。
魚はふち（四三、五二、七八章参照）より脱すべからず。（魚は深い水から出ては捕らわれる）
国の利器は以て人に示すべからず。（三一章参照）

［訳者註］
「柔は剛に勝ち」は柔道の敵の力を利用して防御する精神に通じる。

第三十七章　道常無為

道は常（じょう）にして、なすことなきも、しかもなさざることなし。
侯王はもしよく守らば万物はまさに自ら化せんとす。（自発的に道に同化する）
化しておらんと欲すれば、われはこれを鎮（ちん）するに無名の樸を以てせんとす。
無名の樸もまた欲せざらんとす。（欲望がない）
以て静かなれば欲せずして天下はまさにおのずから正しからんとす。

［訳者註］
無為は道の本体か作用である。それが積極的静寂主義である。